

第1回「美の滋賀」発信方策検討懇話会 会議録（概要）

日 時：令和2年8月7日（金）15：00～17：00

場 所：大津合同庁舎7-A会議室

出席委員：岡田会長、上田委員、神田委員、島委員、藤野委員、保坂委員、山崎委員
伊熊委員（リモート出席）

県出席者：西嶋副知事・近代美術館総長、中嶋部長、村田理事、田村課長
津田参与（リモート出席）

美の滋賀企画室：棚橋室長、小林室長補佐、新井主幹

文化財保護課文化財活用推進室：佐野室長、八代室長補佐、和澄主査、
田澤主任技師

文化財保護課：井上主幹

近代美術館：木村副館長、渡辺学芸員

【議 事】

- 1 開会
- 2 議事
 - (1) 「美の滋賀」の成果と今後の方向性について
 - (2) 近代美術館の取組について
- 3 その他

【発言概要】

● 「議題（1）「美の滋賀」の成果と今後の方向性について」

○委員

事務局から美の滋賀につきまして、これまでの経緯や取組の説明、そして今後の展開の方向性について留意すべき視点及び検討のイメージが示されました。

また、これから具体的な議論に入っていくに当たり、特に御意見をいただきたい点として8つの項目が示されております。

まずは、この「美の滋賀」の委員会につきましては、2段階の役割があるようで、まず一つは、「美の滋賀」の一番のベースの部分の発信方策を検討していくというところで、もう一つは具体の課題として近代美術館の議論をしていくという点があるわけなのですが、まずは特にこの与えられている資料のスライド番号20の部分と21の辺りが一番重要などではないかと思えます。20のところでは、美の滋賀の理念は引き続きベースとなるものであると規定した上で、それを具体的な政策のレベルに落とし込むというまとめを一つしたいというところですね。それが全体のコンセプトとそこでは書かれておりますし、

21のほうでは項目1「全体の方向性等」、「(どこに軸足を置くべきか、キーワードなど)」ということで、例えば「美を通した新しい価値観の提案、Evolving (進化)、楽しみ、癒し」等と書いてありますけれども、そういったところで一つ全体を進めていくキーワードなどが必要ではないかというお話があったと思います。

○委員

まず、ちょっとどこに着地するか分かりませんが、「美の滋賀」ということで、私はいろいろな県の観光の委員会の委員もさせていただいたりしているのですが、その県の観光も含めて課題について、いつも例えで言うのは、食べ物が食事になっていないという状況ではないかと。これもあれもありますよ、これはどうですかという形でどんどんテーブルの上に出されるのですけれども、物がそこに出されるばかりで、その食事、時間、それをどのように空間とか物とかだけじゃなくて、時間の中でそれを共有したり楽しむというような観点ではないのではないかといったときに、「美の滋賀」というコンセプトを食べ方として出していただいたんですが、まだまだ分かりにくいのではないかと。

今日、参考までに持ってきましたのは、この間、大学の授業の中で「美の滋賀」の話を少しさせていただきました。学生たちに「美の滋賀」の話をしまして、そのキーワードを出させて、オンラインで受講してくれた約240人に聞いたものです。あと、「美の滋賀」について、やはり学生たちも分かりにくいという部分があったので、滋賀の美と「美の滋賀」の違いは何ですかと言われたときに、例えば、鍋の料理あるいはスープみたいな食べ物と考えると、滋賀の美は具、「美の滋賀」はその具から染みだしてくるスープの部分ではないかと、そのスープが入っている器というのが滋賀県の自然であり、風土であると伝えたんですが、まだまだそういう意味で「美の滋賀」という言葉自体が学生たちも含めて県民には伝わり切れていないところですし、本当にそのイメージがみんなばらばらというところが、これに関わっている人の間でもあるように思ひまして、そこをもう一度確認をする必要があるのではないかと考えているのが一つです。

それから、あと具体的にスライド21、22に関わって言いますと、大学は人材育成に関わる部分であり、これは別の委員会でも申し上げたのですが、8番目に次世代育成と書いてございますが、既に、もうこれも繰り返し言うておりますけれども、滋賀の中でもこれまでにいろいろな人材育成をし、多くの人材を輩出されていると思いますけれども、その方々が今どうしていらっしゃるのか、いろんな事業で育成された、認定されたという人たちがばらばらにいらっちゃって、その後のフォローがされていないのではないかとこのことがあります。学生などを育成する場合も、その後のフォローとか、まさにこのレポートの中で学生たちもミーツとか出会いというのが「美の滋賀」を聞いて思ったキーワードとして出していますけれど、育てた多くの人材とかがフォローされずに、ばらばらにいて出会う場がないというようなことも、やはりもう一度見直すべきところではないかと思ひます。

それから、最後ですけど、今回、アートとかそういうことだけではなくて、生活とか自

然の美ということがあると、まさにそれが滋賀の土台にあると思うんですが、何年か前に滋賀県の男性が長寿日本一になった時に、それまでもランキングには入っていたんですが、その時になって初めてあらゆるマスコミが、何で滋賀が、と注目しました。その時に思ったのが、結局、人々が健やかで無事に暮らしていることが地域の一番のブランドになっていて、その秘密をみんな知りて来たいということもあるので、やはりそのような健やかな自然とか暮らしというものと美の滋賀の関わりというものは欠かすことができないのではないかと思っています。まさに今、コロナのこの時期にあって、無事で健やかでいられるという風土である滋賀ということの関わりの中で、どう発信していくかということが一つ、私としては観点として考えていきたいと思っていますところですよ。

○委員

いわゆる仏教美術と近代美術と近代の絵画と、そしてアール・ブリュット、どう組み合わせても一つにはならないのではというのが我々庶民の感覚で、なぜかと言えば、仏教美術に関しましては、やはり歴史というものの重なりが価値として評価される部分がありますし、それとアール・ブリュットに関しては、御存じのとおり、もう滋賀県の長い伝統の中での福祉というものが絡んでいる部分があります。

今回、二つの展示の場所が分かれたということで、歴史を除いた部分で今回、近代美術館ができるという意味では前よりは分かりやすくなったと思っています。

ただ、やはり、一般庶民代表として言いますけれども、オリンピックの選手とパラリンピックの選手を一緒に走らせて評価をするみたいな話には、何となく違和感があるという話をみんなでしておりました。

そんな中で、まさに視点として置かれたSDGsですね。「Leave No One Behind」という誰一人取り残さないという意味で、障害があるなしに関わらず、素晴らしい作品であれば全部取り上げるべきではないかという発想の下ならば、今回のこの新しい美術館は素晴らしい美術館になるのではないかと思っています。ですから、アール・ブリュットの、障害のある人の作品だから取り上げるというのではなくて、障害のある・なし関係なしで、良い作品であれば取り上げるという発想で捉え直してみたら、まさにSDGsを実現する美術館になるのではないかと、そういう意味で革新的な美術館になるのではないかと思っています。

ですから、正直な話を申しますと、経済界は福祉関係と言われたら、今までから協力しているからなかなかお金が出しにくい、これ以上無理という話を結構されるんです。そうではなくてSDGsの理念を実現する美術館ですと言ったら、協力してくれる可能性が高いと思っています。今、SDGsに各企業は一生懸命取り組もうとしていますから、「Leave No One Behind」というテーマの美術館なんだと。滋賀県の場合は、アール・ブリュットというものが、そこに一つの流れとして入ってくるんだという捉え直し方をさせていただくことが分かりやすいと思っています。

それから、文化館、文化財のほうです。こちらに関しては、私どもとしましては、いわゆるこれは産業も絡めてですけれども、昔、大分で一村一品運動というのがありましたけれども、滋賀県で一村一仏運動をやってほしい。滋賀県のどこに行っても、この辺りで仏さんいますかと言ったら、あそこのお寺がということで、そこへ行ったら住職や近所の守っている人が仏さんのことを熱く語ってくれるような、そういうところになればと思います。といいますのは、一品一品で見ると、やはり京都、奈良に劣ります。どうしてもあの単品の美しさというのは、京都、奈良に圧倒的に負ける部分があります。

ただ、滋賀県の場合は物に語りがついて物語になれば、そういうまさに着地型観光的な視点で各地域で熱く語るお年寄りがいるという環境ができればいいのではと思っていますし、多分それが地域が無関心になりつつある文化財の保護にも結果的につながってきて、今一番の課題が荒れ果てている文化財ということですから、この辺りの関心を高める意味でもプラスになってくるのではないかと思っております。

○委員

今、SDGsの話がありましたけれども、去年にICOMという大きな美術館の世界的な委員会の総会が初めて日本で、京都で開催されたんですが、SDGsの理念の下、美術館、博物館が今後どうやって活動していくのかというのがちょうど議題に上がったんです。最終的な提言がまとまらない形で終わってしまったんですけれども、今、ミュージアムそのものはその課題に世界的に取り組もうとしています。

その中では、アール・ブリュットの話は残念ながら出ていないんですけれども、ただ例えば、要するに美術館だけではなく、歴史系や自然系の博物館などが参画しているんですけれども、その地域の歴史を取り上げていくことであるとか、マイノリティの歴史、存在を取り上げていくことであるとか、あるいはジェンダーの問題をきちんと取り上げていくということが、ミュージアムにとってのSDGsの参画の一つの方法なんだという提言がありました。そういう意味でも今、滋賀がやろうとしていることは、例えばアール・ブリュットを積極的に紹介しようということは、SDGsの理念の中に入ると思います。

あと、全体の「美の滋賀」の会議に出席していた立場からしますと、ちょうどあの時、3.11の後でして、中沢新一さんとか鷺田さんとかいろんな方がいらしたので、この三本柱だけじゃなくて、この滋賀の自然の美とか生活の美をどう取り上げていけば良いのかという、それこそ、今言われたような三本柱以外のものもきちんとやるべきという議論がありました。多分、パンフレットの中にも、そういうものがどんどん入ってきていると思うんですけれども、個人的に思うのは、今そういう自然環境とかそうしたものを美術館が取り上げるべきなのかみたいな意見はあるかと思うんですけれども、ただ一方で、僕はよく建築展を企画していて、いわゆる建築ビエンナーレみたいなものを観に行くんですけれども、今世界的な建築ビエンナーレでやっているのは、建物を紹介しているだけではなくて、人の生活ですとか自然環境をどう保護していくとか、あるいはその貧困層に対してどの

ような家を提供していくのかとか、そういうまさにそのSDGsの理念を今建築展のほうでは必死になってやっております。なので、近代美術館が建築展をやるということ自体は、スキームとしてはあり得るわけで、その中ではそうした問題を取り上げていくという形で多分整理ができるだろうと思っています。

あと、一つ紹介しますと、この前、大阪市立大学の倉方さんと千葉大の八馬さんと建築展を開催しましたが、なぜ3人かという、建築を一つ取り上げようとしても、僕はいわゆる建物だけじゃなくて、里山とか畑とか、あるいは農園とかそういったものも広く取り上げるべきだと。八馬さんは土木が好きで、倉方さんは歴史系の建物が好きで、それでは、これを統一する理念はあるのかと考えたんですけど、これはあったんです。それはbuilt environmentという日本語に訳しにくいんですけど、構築環境という言葉があるんですが、人間がいろんな形で手を加えて環境化していったものをそういう概念で呼ぼうと。その概念のもとだったら土木でも建物で畑でも一品目に扱えることができると。今、少なくとも展覧会を作るレベルではそのように動いてきているので、僕自身は「美の滋賀」、ないし、そこの中核を担う一つのところである近代美術館がそのSDGsの理念とうまく連携してやっていくことは可能だと思いますし、それは恐らく琵琶湖を抱える、その周辺にいろんな面白いものがあって、先ほど世界農業遺産の話も出てきましたけども、滋賀がそこに取り組むというのは理に適っていますし、ぜひほかの都道府県に先駆けてそこはやっていただきたいと思います。

○委員

私がここにいるという理由は多分、お配りしましたこの資料の中にあるように、膳所高校の美術の授業では、美術館と連携したいろいろな授業をしております、特にこの裏面ちょっと見ていただきたいんですが、二つありまして、一つは、今、話題に出ていますアール・ブリュットの授業です。もう一つが、最近やりましたオンラインの授業です。この「美の滋賀」の基本理念、構想を見ていて、いろいろ魅力を発信する、利用者を増やすというフレーズが出てくるんですけども、教育の現場にいて、ふと思ったのが、一体この対象は誰なんだと。県民と言われていますが、どの辺の年齢層の誰をターゲットとされていて、そこに小中高校生がどこまで入っているんだろう、どこまで具体的に入っているんだろうというのは今、疑問に思いながら考えておりました。

アール・ブリュットの授業を本校でもしております、もう10何年やっている授業なんですけれども、そこで帰着点といいますか、方向というのが、では、私たちはこれをどう見ていくんだろうという答えのない問いを立てて、生徒が自分で考えていって結論がたくさん出る。結論といっても、それなりの考えが広がっていく。それを見ている自分は何なんだろうと自分に返すんです。そのような授業をしていると、彼ら、彼女らのアートから社会とか自分を見るという思考が深まっていったりしています。ですので、アール・ブリュットはというか、障害のある方の造形活動というのは滋賀の一つの歴史でもあります

ので、もちろん美術館ではそれを収集されていく。それを学校として何か連携することによって、いろいろ展開できるのではないかと考えて今やっているところではあります。

こちらのオンライン授業は、このコロナで学校が休校になりまして困ったもんだと。その時、ちょっと思ったのが、生徒がいろんな県内の場所に散らばって住んでいますから、その地域の文化財を取材して何かできないかなと思ったんです。その時に、たまたま去年、近代美術館や県庁と一緒にさせていただいた『文化財を知り、考える』という授業がありまして、これがちょっとヒントになって、狛犬をテーマにしたらいいのではないかと。それで、いろいろな方に協力をいただきまして、狛犬の作品を作っておられる作家さんや大学と連携をして、オンラインで授業をしました。

こういう展開でもできるんだと生徒も大変楽しくやっていました。ですので、私は個人的に美術館に求めるのは、こういう小中高校生のアートを通した育成はすごく大事で、今、学校現場は答えのあるものの解き方を教えるのではなくて、自分が何を問いにしますかというところから探させて、考えさせると。ですから、何に違和感を持って、何がいいと思って、その何が問題なんだと、探求させる授業にどんどん移っております。ということは、アートを通して自分たちの社会をどう見るとか、アートの不思議な部分とかを自分たちで考えていく、そういう授業を学校がやろうとしたときに、どこか相談する専門家とか、どこか一緒になってこの子らのためにこういう授業をしたいから協力していただませんかを持ちかける学芸員さんがおられたり、何かそういう窓口ができたらうれしいですし、どんどん裾野が広がって行って、その子らが大人になった時に、美術館に対して気軽に足が向いていったりするのではないかと考えます。

○委員

言にくいことを申し上げますが、「美の滋賀」をもう一回編み直そうという時に、あそこまで詰めていた新生美術館の計画がなぜ頓挫したのかということをしっかり検証しないと、また同じことを繰り返すのではないかと考えています。本当に僕みたいな一般人は47億の美術館が不落で、上積みもできなくて、県立体育館はあるのに建て替えでなく新しい体育館が100億でできると聞くと、なぜと思っているのが正直なところですが、結局、不落になった時に、何とか造ってほしいという応援団が県民の中にいなかったと思うんです。そこが一番の課題と思っています。

膳所高校の話も教育を通じてそういう応援団を作ろうとしているのだと思います。私も高校の書道の教師の時、書が好きな人になってほしい。筆書きの看板を見て好きとか嫌いが言える感性を持ってほしいと思って授業するというのをずっと言い続けてきました。そうやって応援団を作るというのを、やっぱり県としてもやっていただかないと無理なのではないかと思っています。

では、美術館とかこういう美術関係の行政で、一番応援団になる人は誰かと言ったら、手前味噌かもしれませんが、市民レベルの草の根で芸術を愛好して、いろんな創作活

動をしている人たち。それは文化も含めますが、表現活動している人たち、そういう人たちが一番の応援団であるはずなんです。ですから、やはりそういう人たちを繋いでいく努力をしていただくことが一番必要ではないかと思っています。

先輩から聞いてきた話ですけれども、滋賀県は以前、文化不毛の地と言われていたと聞いています。それで、武村知事の時代に出来たのが各地の文芸会館だと聞いています。僕はあの施策は一定の効果があったと思っています。今、滋賀県には各地域で小さい単位でいろんなサークルがたくさんあります。それはたどっていくと、やはり文芸会館が一番中心になって、そこに寄っています。それで、もっと小さい単位で公民館とかそういう単位で集まっているんです。それで、ずっとたくさんのサークルができて、その人たちが本来は応援団になるべき人たちなんですけれども、それらを繋ぐこと、一か所に集めて繋ぐことがなかったんです。

それで、私は至るところで大きなギャラリーの建設をと訴えていますけれども、それを申し上げる理由は、滋賀県には大きなギャラリーがないからなんです。滋賀県美術協会は滋賀県美術展覧会を運営しておりますけれども、美術館でなかなか以前はできなかった。何とか貸して下さったけど、狭過ぎて1期で全部を展示できない。前後期の2期開催でしかスペースがない。県展だけではなくてあらゆる展覧会が一生懸命育てて大きくなっていくと、今度は展示する場所がないというジレンマに陥っています。ですから、近代美術館を本当に良くしようと思ったら、本当に思い切った施策で言うと、ギャラリーの部分を別に持っていく。元のギャラリーは企画展示室として、もっと充実させる、あるいは収蔵庫をもっと広げる。ギャラリーは別の場所に大きいもの、ギャラリーなんてがらんどうでいいので、造っていただくと、どちらにもいいものになると思うんです。

これがどれだけ大きな効果を及ぼすのか具体例を言いますと、書の甲子園という高校生のコンクールとしては日本で一番大きいコンクールを毎日新聞がやっています。これは開催されているのは大阪市立美術館の地下ギャラリーで、全面使ってやるんですね。

来年で30回、30年続くんですけども、もう今やその会場風景が高校の書道の教科書に掲載されるまで認知されています。

ところが、再来年度から大阪市立美術館が改修になって2年間使えないんです。どこかで代替しないとイケないのです。今必死になって探しています。その検討委員会の委員にも選ばれて、この間、会議に出てきました。そこに候補場所の一覧というのが出ていましたが、どこも手一杯で、それだけの大きい規模の展覧会をさせていただきますと言ってもできないんです。そこに滋賀県立近代美術館もありましたが、備考欄に狭くて遠いとコメントがあるだけでした。ほかの美術館はたくさん理由が書いてあったので、すごく悔しかったです。ですから、何か抜本的に思い切ったことをやっていただければ、ただ箱物を造ったではなくて、そこにみんなが集まってくるわけです。そうすると、繋ぐことができる。これをこれから本当に真剣に考えていただきたい。

確かに滋賀県には多くの財産がある。先ほどから自然美などとも繋がってとのご意見も

ありました。それなら琵琶湖博物館と繋がればいいと思って僕は聞いていましたけど、どうしても分野が違うというのでうまく繋がっていないと思います。それから、これはもう前から言っていますけども、イナズマロックフェスティバルを美術のほうでなぜ利用しないのかと思います。もっと連携させて、いろいろなものをやればいいと思っているし、そこにBIWAKOビエンナーレも連携させたら、すごく大きくなると。そのような繋ぐことをやはり私は行政に一番期待します。そういう観点で見ただけでいいと思います。

結局、人なんです。人と行政が繋がりを持つことは、すごく大事なのではないかと考えています。残念な話を二つしますと、この間、奈良県立美術館に行ってきました。大橋コレクションという、具体を中心に現代美術、戦後の現代美術を展示するという展覧会に行くと感動したんですけども、大橋嘉一さんという方が亡くなる時に、遺言で奈良県立美術館と大阪の国際美術館と出身校の京都工芸繊維大学の資料室と、この三つに自分のコレクションを分けて寄贈しておられるのです。白髪一雄とかもう今となってはすごい値段付いている人のものもあり、全部で2000点だそうです。何がショックだったかという、大橋さんは大津市の方なんです。何で滋賀県に声をかけてくれなかったのかと思いました。調べたところ、大橋さんは近代美術館が開館する6年前に亡くなられています。でも、多分繋がりができていたら、当然、その頃には構想は出ていますから、そこに乗ってくれたと思うんですけど、繋がっていなかったから滋賀県には残ってないんです。

そんな話をある方と話していたら、もうお一方、寺田小太郎さんという方を教えてくださいました。現在の東京オペラシティの土地は全部その方が持っておられた。それを文化のために出されて、そこに東京オペラシティアートギャラリーという美術館も造って、そのために現代美術を物すごい勢いで購入して、それを展示しておられるんです。寺田さんは東京の方ですが、実は御先祖は五個荘の方で、とても滋賀に思い入れを持っておられるので、自分の家に仏さんのお堂を造って、そのお堂の名前は東円堂と、実際にある地名をそのまま取っておられるんです。だから、寺田さんはもうお亡くなりになったんですが、滋賀県から働きかけていたら絶対に協力してくれたと思うということもお聞きしました。

そういう人の繋がりをもっともっと大事にさせていただけると、すごく大きいことが生まれるのではないかと私は思っています。

○委員

当初の「美の滋賀」の案の中では、この神と仏の美と、それから近代美術館の資産、それとアール・ブリュット、この三つを融合するという非常に壮大なプランを掲げられていたと思います。もしこれが実現すれば、これまでにない価値観を提示する非常にユニークなものになったと思っています。

ただ、実際、近代美術館のスペースを見ていると、ちょっと無理かなという思いも正直ありました。

ただ、当初の懇話会の委員の皆さんのお名前を拝見すると、かなり強力なメンバーがい

らっしゃった。このメンバーがいろいろな形で助言をされて形を作っていけば、狭いスペースではあっても、SANAの建築によって独特のものがもしかしたらできたのではないかと。

これを進めておられる時に、多くの関係者の皆さんが金沢21世紀美術館、もちろんSANAの建築ですし、この滋賀の当初のプランのモデルになるのは金沢21世紀美術館だったものですから、その先行例として御覧いただいたと思います。ですから、その発展系として当初のプランは実現をした可能性は非常に大きかったと思います。

ただ、一つ、金沢21世紀美術館の課題というのが実はありまして、全国の美術館の成功例として、特に現代美術館、滋賀の県立近代美術館も割と現代美術を中心に活動をされて、もちろん日本画とかそういった地域の資産も活用して多彩な活動をされていましたけれども、かなり現代美術館的な志向をお持ちだったと思います。現在もそれは継続されていると思います。普通、現代美術館というのは、国内では年間入場者で10万超えれば及第点、場所によっては年間入館者が数万人しか得ることができないというのがどちらかという一般的なです。

ヨーロッパの美術館でも、テート・モダンのような大きな観光地的な美術館はかなりの人が行きますけれども、ドイツの例えば小さな美術館、現代美術館であれば、やはり年間数万人からせいぜい10万程度というのが一般的です。ですから、現代美術を志向する美術館、あるいは日本画ももちろん、アール・ブリュットもありますけれども、今後この美術館が活動を再開したときに、もちろん再開当初は話題性がありますので、お客さんはある程度来てくれると思います。

ただ、その後は必ず落ち着いてくると思います。その辺りを当初からやはり見込んでおいたほうがいいと思います。もちろん、いろんな展覧会の内容によって、あるいは活動の幅の広さによって来場者の多少の増減はありますが、必ず落ち着いてくるというのがこの館でも一般的だということです。それを最初から含み置いた形で再出発しないと、随分お金かけたのに、それほど入館者が増えないではないかみたいなことになりがちです。

これは1980年前後にできた公的な美術館全ての課題です。これは必ずしも日本だけではなくて、ヨーロッパの比較的小さな都市にある美術館もほぼ同じような課題を抱えていて、それぞれが独自の持ち味を生かして活動をしているというのが実態だと思います。ですから、美術館には人が来るんだというのは、金沢21世紀美術館が幻想を振りまき過ぎたと思います。見かけ上は確かに成功例ではありますが、これは三つの指標によって成功しているんです。

一つは、立地条件。つまり、あの場所はとてもアクセスがいいです。例えば、兼六園という有名な庭園があります。それから、香林坊という繁華街。それから、金沢城公園という全ての観光地が周りを取り囲んでいます。

それから、金沢は例えば京都とは違い、コンパクトです。大体2日間あればほぼ主要な観光地を回ることができます。ですから、金沢21世紀美術館は必ず行かなければいけない

場所になっています。

それともう一つは、滋賀でもし実現していたら、SANAAの建築の魅力というのが発揮されたと思いますけれども、そのSANAAの建築の魅力、これがやはりかなり大きなウエートを占めていると思います。

ですから、金沢21世紀美術館は確かに成功しているようには見えますけれども、どこの県であれ市であれ、それを指標にするのはやめたほうがいいというのは正直なところですよ。

例えば、金沢21世紀美術館のあの丸いガラスの箱を、滋賀の近代美術館の場所にそのまま持ってきても、人は必ずしもいらっしやらないと思います。

ですから、そういった意味で金沢に視察に来られる方は非常に多いんです。開館したのは2004年ですけども、開館当初は30万人を年間入れましょと。この30万というのは、無料入館者も含めて数えていました。

ところが、蓋を開けてみたら約130万から150万の方が入館され、約4分の1の方がチケットを買ってくださっていたんです。それが北陸新幹線開通後、一挙に100万人増えまして250万人の方があのエリアにいらっしやって、4分の1の方がやはりチケットを買ってくださるといって、ちょっと異例の状態になりました。

実は2年前に初めて入館目標を250万から220万ぐらいに下げたんです。これは実は地元の新聞社に批判されました。これ以上、お客さんが入っては館の施設とか、運営そのものがもう破綻を来すんじゃないかということで、やはり適切な人数というものやはり重要ではないかと。これは今回の項目の中でいきますと、コロナウイルスに関するものと非常に連動してくると思います。展覧会というのは、ある程度の落ち着きの中で適切な人数というものがあると思うんです。ですから、そういった意味で今は入場制限をしておりますし、今後もある程度入場制限あるいは時間指定チケットみたいなものの導入も、どこまで継続するか分かりませんが、そういったことが必要になってくるのではないかと考えています。

○委員

繋ぐという話は私もすごく重要なことだと思っていて、結局、琵琶湖文化館と近代美術館は分かれる組織になることにはなったものの、この「美の滋賀」の三本柱を取りまとめる何か事務局のようなものを県の中というよりも、むしろ近代美術館の中に作ったほうがいいのではないかと思います。それは具体的に何か展示できる場所を作るという意味ではなくて、オンラインも含めてそこにアクセスすれば、いろんなことが相談できる。例えば、市民が何か一緒にやりたいと考えた時に、そこに行ける、ボランティアの人たちが何かやりたい時にそこに行ける、あるいは学校の先生方が美術の授業で、ご紹介されたような活動をする時にも、美術館と相談しながら何かいろいろできることというのはあると思いますし、成安造形大学などにしても、美術館の側から何か協力を大学にお願いするということもできると思うし、そういうプラットフォームみたいなものを設けたほうがよいので

はないかと思えます。

今回、資料を拝見していて、「美の滋賀」という言葉とか、あるいは「滋賀県をみんなの美術館」にと、素敵な言葉だとは思いますが、ちょっと気をつけなければいけないのは、美術とか芸術という言葉に対して好きな人はいいんですが、何か自分からすごく遠いもの、何かお金持ちの時間が有り余っている人たちだけが享受できるものというイメージを持っている人というのは、まだまだ多くいると思うんですね。「芸術新潮」という雑誌の名前のためになかなかみんなが入ってきにくいというところで日々私は悩んでいるんですが、美術の滋賀と言わないで「美の滋賀」と言っているところは素晴らしいと思うし、みんなの美術館にというのを、例えばみんなの博物館にと言ったらいいかというと、博物館入りというネガティブな言葉があるように、なかなか一般の人がアクセスしにくいところというイメージを持たれてしまうかもしれないので、言葉は今のままでいいんですけども、そのプラットフォームになる事務局的な美術館の組織の中にあるものが、美というのは絵画や彫刻だけではなくて、先ほどから出ていますように、SDGsや自然美、福祉問題など、そういうことも全部含めた意味での美ということをもっと市民にアピールできる、そういうプラットフォームをぜひ美術館の中に作っていただきたいと思えます。

○委員

「美の滋賀」はやはり大変、今日的で素晴らしい理念で、9年ほど前に創られたということですが、今も通用するものですので、この冊子には10年かけてやろうと書いてあるんですけど、もうあつと言う間に10年が近づいていますが、ただ理念的には今後も生かしてSDGsとともにEvolving SHIGAの重要なキーワードとしていくのはおかしくないという感じがいたしました。

ただ、この中には非常に理念的にいい部分と非常に具体的な話とか結構いろんな話が混在している感じがします。

ですから、仕切り直しをするに当たって、理念的なものはやはりきちんと整理して継続するという作業をもう一回すべきではないかと。何が理念だったんだということをもう一回、整理するということが必要ではないかと。

それとあと、実際のことでですけど、「美の滋賀」の理念的に言うと、一応美術館の中のことを想定しているものの、概念としては非常に広い美に対する新しい価値観とかそういうことを言っています。ですから、本当は自然環境から始まり生活、文化、歴史、工芸全て含んでいるわけで射程距離がとても幅広いはずなんです。ですから、美術館と琵琶湖文化館の話のことだけがまとまればいいものではないはずなんです。やはりそういうことだなと思ったのは、第1弾として美術館をやろうと書いてあるんです。その言葉の裏には、それは最初にやるけどそれだけでは全然済まないという話がやはりあると思うんです。だから、そこをもう少し計画性を持たないと、では美術館や博物館以外はどうやって美の滋賀を成り立たせていくんだというところが、残りはどうしたいんだというのがあまり議論さ

れていないようなところがありまして、そこは単純に言いますと、美術というエリアからもうはみ出していくところなんです。だから、では、そこをどう進行していくのかとか、見える化するとかそういう議論がちょっと足りなかったのではないかという印象があります。

それとあと、美術館等につきましては、今、現代美術の現状は基本、やはり Socially Engaged といいますか、SDGs 的な社会テーマに向き合っていくということがもう一番アートとしての基本になっておりますので、まさしく近代美術館から改めて現代美術館になるという姿勢が必要で、それでこそ SDGs みたいなものとか、新しい価値観に向けて美術はどうあるべきかということをきちんと問うという姿勢が出ると思うんです。ただのモダンアートでは、そこはちょっと違うと思うんです。ですから、そういう姿勢をはっきり美術館が打ち出さねばならないということがあって、ネーミングを変えるかどうか私には分かりませんが、そういうスタンスを打ち出していけないと、美術館は今までのままなのではないかということになってくる可能性があると思うんです。

ですから、その美術館のポリシーをはっきりしていくということと、それに見合った企画が必要で、例えば先ほどもあったように、地域の問題とか地域の民俗文化とか、例えば火祭りとか工芸とか滋賀県にはいろんないいものがありますが、そういったものを、アール・ブリュットも含めて、本当に取り上げて、きちんとそれをアートとして提言していいのかということなんです。それは大変難しい作業だと思いますし、ただそういうものに目を向けていかないと、この美の滋賀の理念に沿ったものにはならないということがあると思うんです。それは裏を返せば、非常に現代美術であるということなんです。きちんとやるということだと思えます。そこでリンクはされているので、やればできるはずだと思っています。

ただ、得てしてそういったものの集客がいいとは限らないという問題があると思うんです。それは観光とかに直接つながることではないわけです。

だから、その辺をうまくやらないと、SDGs のコンセプトを打ち出せば資金は動くという提案も、それは分かりやすいお話なんですけど、ただ美術館を動かす時にそういった流れで本当に資金が動くのかとか、お客が入るのかという問題ですね。それはどう関心を持ってもらえるかということに対して、すごく積極的にやって新しい滋賀モデルというのを提案していかないと、お客さんは振り向いてくれないという気がするので、そこを相当真剣にやらないとお客さんが入らないのではないかと私を心配しております。

●「議題（２）近代美術館の取組について」

○委員

先ほどプラットフォームという話がありましたけども、近代美術館自身にそういうプラットフォームを持つという考え方と、もう一つ、例えば友の会組織を非常に充実させて、まず一般社団法人化して何かできないかという中で、例えばですが、滋賀県内の公共機関、

特に小学校、中学校、高校辺りに友の会としてアール・ブリュットの作品を展示する、いわゆるアートレンタルができないかということを発案したいと思っております。各企業が、例えば地元の小学校なり中学校なりに年間10万の会費で参加させてもらって、会社の名前でその学校にアール・ブリュットの作品を年間4回ぐらい入れ替えるぐらいの間隔でやっていったらどうかと思っております。今は、コロナ渦で各企業は厳しい中であり、気分的には難しいんですけども、そういうことが例えば地元貢献という形で何かできないか。

まず、美術館が持たれている調査・研究、保存・収集、レファレンス、教育・普及、それから作家の育成とか、その教育・普及の部分でまず小学校、中学校辺りの子が毎日アール・ブリュットに接する機会ができ、それが普通になってきたら、それでは、美術館に行ってみよう、あの作家の作品が今後出ているとなると思います。いわゆる美術館レベルでない作品をアートレンタル出来ないかと。滋賀県で200何十校になりますので、10万ぐらいかかるとは思いますけども、収支的に回れるのではないかという感覚でおります。

アール・ブリュットというものに我々ほとんど接する機会がありません。私はたまたま近江八幡にNO-MAがあるんで何回か行きますけども、なかなか接する機会がありませんので、小中学校から始めて、日常にアール・ブリュットが近くにあるという環境で育てば、いろんな意味で近代美術館のお客様の増員にも近づいてくるのではないかと思います。

また、一度、数字を落とし込んでみたもので提案をさせていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○委員

今、資料の中で休館中でも学校の出前講座など大変多くの活動をされていて、ありがたいと思うんですが、その反面、先ほどありましたけども、県内小学校が大体220校、中学校が約100校、高校が約60校ございます。単純にこれを割りますと、何校にどれぐらいの展開されているのかというのがちょっと分からないので、この数字をどこまで見たらいいのか分からないんですけど、実際のところ、その中でも頑張っていたらいいと思います。

教育・普及、教育のところが出てまいりましたので、少し発言をさせていただきたいんですけども、多様性のある学びを重視した鑑賞プログラム、年代別に再編とあります。先ほども申し上げましたように、いろいろ美術館にこういう体験を求めていく世代というのは、もちろん子どもから大人からお年寄りまで変わりますので、そこで分けて整理するというのも一つなんですけども、やはりまずは美術館としてこのようなプログラムが最低、これぐらいできますと、例えば、今、実際にあるものでこれだけできますよ、と示す。でも、それ以外のところに関しては、もっと工夫というか、各学校、各地域の要望、例えば長浜市から要望があったら、長浜市にはこういう仏像がありますよとか、こういう文化がありますよといって、美術館とその地域の学校なりが相談してオーダーメイドのものを作っていく、そういう取組があれば、その例が重なっていったら美術館側の教育普及も強くな

るし、学校側もその自分の地域に合ったアートプログラムが出来ていたり、広がっていくのではないかと思います。それで、先ほどおっしゃったように、ここは学校に美術館から来てもらってやる、ここは美術館に実物があるから観に行くという、この相互の関係とかが出来てくると思いました。

このコロナで、やはり本校も思ったのが、外とのつながりがやはり大事だと。日頃から美術館とは連携させていただいているんですけども、県立高校のネット環境は大変弱くて、例えば生徒が家で撮った写真を学校にメールで送ってきなさいということさえできない状態だったんです。それぐらいネット環境が弱い。

でも、例えばこのオンライン授業にしても、大学のほうでZoomのハブを持ってもらって、そっちへみんながアクセスするようになると、割とそこが解消されたりしましたので、外とオンラインでつながったり、ここはオフで学校ですとかということができたので、オンとオフというんですかね、オンラインとオフラインの違いとか、あるいはどこがハブになって中心になって今回は組んでいくとか、そういうところが考えていけたらいいのではないかと思います。

○委員

この再開館後の運営の基本的な考え方は非常に盛りだくさんで、職員がそんなに多くない中で、これだけできるのかというのが率直な感想です。所蔵品も結構増えてきて、多分その保存管理、修復なんかだけでも担当の学芸員の方が展覧会や所蔵品の研究もやりながら多分やっているのではないかと。保存の専門職の方はいらっしゃいませんよね。

あとは、広報の部分で友の会の充実とかホームページ、SNS、メディア戦略、ブランディングまで書いてあって、これは実は金沢では広報室だけで正職員3人、プラス非常勤の人が2人の計5人います。保存・修復は専門の学芸員を1人正式採用しています。この教育・学習の部分では、交流課を、いわゆる普通の美術館だと教育・普及、普及課という名前が割と多いですが、館によっては3、4人いるところもあるかと思いますけれども、金沢の場合は課長も入れて5人プラス非常勤の人たちが2人の計7名ほどの体制で動いています。もちろん、金沢の場合は新しい文化の創造という大きな目標ともう一つ、賑わいの創出という普通の美術館では考えられない目標があり、いろんなプログラムを多彩に展開しているのですが、それだけの人数でも手一杯です。なので、非常に理想的な項目が並んでいます。正職員がもし増やせないとすれば、例えば業務委託でもいいですし、そういう形で例えば広報の専門の方を県から出向という形で受け入れる工夫も必要と思います。これから、委員の方々が多分、いろんな御提案をされるでしょうし、それを全て盛り込まれると、さらにこれから1.5倍ぐらいになるのではないかと思いますので、それもある程度視野に入れてどういったことが可能なのかを、御検討いただければと思います。

○委員

私もほぼ同じようなことを考えていたんですけれども、この基本的考え方の中で交流・連携という項目があり、また先ほど皆さんのお話でも、非常にそこが重要だという市民や学校との連携、文化館との連携も必要になってくると思うんですけど、ここに対してマンパワーが絶対に必要であり、コーディネーター職というか、専門でそれに従事する人というのが必ず必要だと思います。それを学芸員が兼業でやるというのは多分回らなくなると思いますし、どこもかしこもきっと人手不足ではあるものの、この部分をやはり充実させることが今後の、この美術館の特徴というか、ポイント、重要なところだと思うので、ここにはぜひ人を割いていただきたいと思います。

去年、安曇川でアートスポットプロジェクトを拝見してすごく面白かったですし、今年も見たいと思っていますけど、あのようなプロジェクトも美術館の再開館後も継続していただきたいですし、ただそういうことをするには、場所を探したり、地域の方と交流したりすることによってしか生まれてこないプロジェクトであり、仕事量が多いと思うので、ぜひここは他が少し大変でも人を割いてやっていただければと思います。

○委員

ここまで言われているように、限られた人数でこれらを全てすることは多分無理で、あと友の会やキャンパスメンバーの運用は、僕の勤務先の美術館でも当然やっていますが、これは結構大変です。その専属のスタッフがいて、継続的にやっても望むような数字になかなかならないと。しかも、そのリピーターの獲得というのは、正直言って、これだけ休館が続いた美術館でももちろんリピーターが来ると嬉しいですけど、正直、まず無理だろうと。そういう前提からいくと、ちょっと駄目元で言いますが、どの美術館の友の会でもいいから会員証を持ってきたら割引くぐらいの姿勢、つまり美術ファンを取り込む、まず近代美術館を好きになってくださいと、滋賀を好きになってくださいと、それぐらい下手に出て、その人たちがやがてリピーターになってくれる、友の会制度ないんですかと言ってくれるぐらいのことが必要だと思います。まずは来てもらうのが大事だと思います。その制度ならリストを管理したりする必要がないので、限られたスタッフでもできるはずで。ほかの美術館の会員証を持っていたら割り引きますというJAFのような感じで。

○委員

美術館の学芸員が何人いらっしゃるかを知っているのですが、新たなことは言えないと思って黙っていたんですけど、一つだけ提案です。学校出前授業プログラムとか地域出前プログラムとか体験美術館とかあれだけの人数で、これだけやっていると驚いています。これを全部学芸員が出かけて行って主体的に指導しているのでは、やはり限界があると思います。

だから、もっと他の組織を使われたらどうですか。場だけ提供されて、それで実施は別

のところに向けてしまうぐらいのことをやっていいのではないかと思います。手前味噌ですが、美術協会や書道協会は、県全域を網羅している組織になっており、美術協会は長い歴史があり、書道協会は更に長く70年を超えています。そのような全県で動けるところをうまく使っていただけると、お互いにウイン・ウインになると思うし、先程言いました、より強い応援団の一員になってくれると思っていますので、ぜひ御検討ください。

○委員

私も大体同じような意見でして、今日書類を拝見しましたら、近代美術館が美の滋賀に沿って地域のほうに向かって活動をいろいろやろうとしているという姿勢は分かっているんですけども、今、あったように、出前プログラムばかりやっていると本当に大変だと思いますので、うまくコントロールするプロデューサーのような役割なのか、学芸員がどう変化していくべきなのかということもあるんですが、学芸員自身がプロデューサー的にやっていくのか、コーディネーター的な役割ということもあるかもしれません。逆に学芸員ならそういうことをせずに、私も今、大学の研究所なんかの企画をいろいろやるんですけども、どうしてもいろんなことをきちんとやろうとすると、人員が足りないという問題にすぐ直面します。では、どうするかということですが、大学ではUR A (University Research Administrator) といって、研究員をサポートするコーディネーターのような人を雇って、研究者自身が走り回るのではなくて、それをサポートする人がやるという方法も最近あるようです。ですから、こういう地域との連携を、学芸員が一人で全部やることは大変難しいのではないかとということもありますので、オンラインでうまく利用するというのも一つ手段として出てきておりますので、先ほどプラットフォームという言葉もございましたけれども、その辺をどうしたら合理的にうまく地域と連携し、地域の文化をうまく吸い上げながら、かつ教育やいろんなことに生かしていけるような仕組みができるのかということと、ここがこれまでの美術館に足りなかった部分だと思うので、そのシステムをどううまく構築するかということ。あとやはり人手が足りないのではないかとこの心配があります。担当している人数を見ると、こんなに少ない人数でやっているのかというのは本当に驚くところがあるんですけども、適正な人員がどうなのかということも含めて検討いただければと感じました。